

プロテスタントの視点から考える 修道院の重要性について

藤 原 淳 賀

序

- I. 修道院について
 - A. 修道院の定義
 - B. 修道院の歴史
 - 独住修道から共住修道へ
 - 修道生活の動機
 - 狭き門へ
 - 『聖ベネディクト会則』
- II. プロテスタントとして修道院をどのように考えるか
 - A. 「断捨離的」プロテスタント宗教改革
 - B. H・リチャード・ニーバー
 - C. ジョン・H・ヨーダー
 - D. 中世のキリスト教と文明を担ってきた修道院
 - E. ジョン・ウェスレー
 - F. スタンリー・ハワーワス

結語

Appendix 修道院との出会いについて

- A. グレンスタル・アビー
- B. グレンダロッホ
- C. クロンマクノイズ

序

昨今では、日本のプロテスタントの中にも修道院的な靈性に対する関心が潜在的に広がっているように感じている。修道院についての話をすると、関心を持って、敬意を持って耳を傾けてくださる方が多い。それは靈性への関心から来ている部分もあるであろう。¹ 本稿では、プロテスタントとして修道院をど

1 Cf. 篠原明, 『「靈性の神学」とは何か—福音主義の靈性を求める対話』, (あめんどう, 2019), ケン・シゲマツ, 『忙しい人を支える賢者の生活リズム』, 重松早基子訳, (いのちの

のように考えるかを、特に、H・リチャード・ニーバー、ジョン・H・ヨルダー、ジョン・ウェスレー、スタンリー・ハワーワスといった神学者（最後の二人はアングリカン、メソジストという伝統）を念頭に置きながら、考察する。また、筆者自身の修道院との出会いについてAppendixとして記しておきたい。

I. 修道院について

A. 修道院の定義

修道院とは何であろうか？『精選版日本国語大辞典』によると「一定の戒律もとに、共同生活を営んで修行を積むキリスト教の修道士または修道女の団体。また、その僧院」とある。

たとえばギリシア語のエクレシア（ἐκκλησία）からの翻訳である「教会」は、教会堂という意味で用いられることも多いが、本質的には、キリスト者の集まりを意味する。²したがって、そこに教会堂が無くとも、野外であっても、「教会」は成り立つのである。逆に、キリスト者の集まりがなければ、教会堂は「教会」とはならない。同様に、日本語での「修道院」は、修道士、修道女が修道生活を送る施設を指すことが多いが、彼らの修道生活がそこで行われていることが前提となる。

修道士、修道女とは、特別な誓願を立て、そのように生きる人々を指す。修道会によって細かな規則や伝統は異なるが、修道会は3つの誓願を共通して持っている。それらは、清貧（私有財産の放棄）、貞潔（独身生活）、従順（上

ことば社, 2015). スーザン・S・フィリップス, 『スピリチュアル・ディレクション: 霊的同伴への招き』, 重松早基子訳, (いのちのことば社, 2018).

2 ἐκκλησία, ας f. “the totality of congregations of Christians—‘church.’” σὺ εἶ Πέτρος, καὶ ἐπὶ ταύτῃ τῇ πέτρᾳ οἰκοδομήσω μου τὴν ἐκκλησίαν ‘you are Peter, and upon this rock I will build my church’ Mt 16:18.” Johannes P. Louw and Eugene Albert Nida, *Greek-English Lexicon of the New Testament: Based on Semantic Domains*, (New York: United Bible Societies, 1996), p. 126.

長への服従)である。かつては独住修道(一人で行う修道生活)もあったが、今日ではほとんどの場合、共住修道施設(修道院)で修道生活が行われている。戒律の厳しい修道院もあるが、第二バチカン公会議以降は、時代に合わせて比較的緩やかなものになっている。

『ブリタニカ国際大百科事典』は、より詳しく、修道院を以下のように説明している。「公認されたキリスト教の修道生活を共同でおくる人々の住居、またはそのなかでの生活をさす日本での総称。」³ 修道院というのは、あくまでも「日本での総称」である。英語では総称的にはmonasteryを使うことが多いと思うが、厳密な意味で修道生活を総括するラテン語は無いようである。というのも、修道生活は、少なくとも3世紀にまで遡るものであり、様々な名称が用いられてきているからである。

「ローマ教会法ではローマ教会法ではmonasterium(ベネディクト会など)とdomus religiosa(monasterium以外)との区別がある」。Domus religiosaは直訳すると宗教的家屋あるいは家庭であるが、通常、近代以降の海外宣教会あるいは活動的修道会の会員の住居を指す。「一般の名称としてはabbatia(司教から独立した自治権をもつ大修道院長をいただくもの)、claustrum(回廊のあるもの)、conventum(フランシスコ会など13世紀頃以降のもの)、communitas(マリア会など現代のもの)などが用いられ、すべて修道院と訳される。ときにmonasteryは男子の修道院についてのみ用いられ、女子修道院はconventと呼ぶことがある。」⁴

上記Monasteriumは英語ではmonasteryであり、abbatiaはabbey(大修道院、いくつかの修道院の集まった修道院群)、claustrumはcloister、conventumはconvent(近代以降の女子修道院、また托鉢修道士の修道院がこの名称で呼ばれている)、communitasはcommunityである。また少修道院は英語ではprioryと呼ばれる。

本稿では、「修道院」をこのように修道者の修道生活およびその住居という

3 「修道院」,『ブリタニカ国際大百科事典 小項目版 2019 プラス世界各国要覧』。

4 Loc. cit.

意味で包括的に用いている。

B. 修道院の歴史

修道活動はなぜ始まったのか。またいつどのようにして始まったのか。修道生活への動機づけとなるような聖書箇所はいくつもある。

結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。(マタイ19：12)

だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。(マタイ5：48)

復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。
(マタイ22：30)

思い煩わないでほしい。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世の事に心を遣い、心が二つに分かれてしまいます。独身の女や未婚の女は、体も霊も聖なる者になろうとして、主のことに心を遣いますが、結婚している女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世の事に心を遣います。(1コリント7：32-34)

また、修道生活は、少なくともアジアの聖フランシスコまでは、⁵ 使徒的生活であり、修道士たちに最も強い印象を与えたのは「使徒言行録」に記された

5 聖フランチェスコにおいては、使徒に倣う「使徒的生活」からイエス・キリストに倣う「福音的生活」への移行が見られる。

初期のキリスト者の記述であったという。⁶

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。(使徒言行録2: 42-47)

信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。(使徒言行録4: 32-35)

最初の修道士が誰なのかを知ることはできない。聖ヒエロニムス(347頃-420)はテーベの聖パウロス(228-342頃)だというし、アレクサンドリアの聖アタナシオス(298-373)は聖アントニオス(250頃-356)だという。⁷ いずれにしても、3世紀の後半には、少なからぬ人数のキリスト者が修道生活に惹かれて、エジプトの通常の生活を離れ、砂漠に向かったのである。

6 M. H. ヴィケール、『中世修道院の世界：使徒の模倣者たち』、渡辺隆司、梅津孝孝訳、(八坂書房、2004)、pp. 25-30.

7 フスト・ゴンザレス、『キリスト教史・上巻：初代教会から宗教改革の夜明けまで』、石田学訳、(新教出版社、2014)、pp. 153-159.

アントニオスは、中部エジプトの裕福な家庭に生まれている。20歳の頃キリスト者の両親を失ったが十分な遺産を受け継いでいた。しかしある日、教会で「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」（マタイ19：21）という言葉聞いて衝撃を受け、財産を全て放棄し、砂漠に入り修道生活を始める。通常、これが修道生活の始まり、あるいはマイル・ストーンとして理解されている。これはミラノ勅令（313）の前のことであった。

独住修道から共住修道へ

アントニオスは世俗社会と全く接触がなかったわけではないが、独住の修道者であった。しかし町を離れて修道生活を送ることを求める人々が何千人も砂漠へと向かうようになっていく中で共同の修道生活の必要が生まれてくる。最初の共住修道生活の創始者が誰かも正確にはわからない。聖パコミオス（290頃-346）は、共住の修道院制度の創始者ではないかもしれないが、その制度を整え大きな影響を与えていくことになる。

パコミオスはアントニオスと同じ頃の修道者である。彼は、隠修士からの指導を7年受けた後、ナイル川上流のテーベ近くに共同生活の修道施設を建て、独住修道者たちをそこに集める。試行錯誤の後、清貧（私有財産の放棄）と従順（上長への服従）を入会の条件とし、共住の修道生活を始めていく。そこではすべての人に労働が要求された。それによって自分たちの生活を支えることができた。修道士が作ったものは近くの市場で売られ、収入は、自分たちの必要のためだけでなく、貧しい人々への施しのためにも用いられた。共同の生活、一日二度の共同の祈りが持たれていた。また服装も皆同じものとした。共同の食事を用意されていたが、食事は自室で取ることも認められていた。食事の時間や断食も個人にまかされていた。祈り、労働、共同生活、そして静まりのバランスを取るようにパコミオスの修道院規則は作られていった。組織的にも、修道士の居住棟には長が任命され、その上に修道院長、そして更に大修道院長が置かれていた。パコミウスの修道院規則はギリシア語、ラテン語にも訳

されている。⁸

そのような修道生活は、今日われわれが通常考える以上に魅力的であったようである。パコミオスの存命中に少なくとも9つの共住の修道院と数百名の修道者が（あるいは11の修道院と約7000人の修道者が）いたという。⁹ さらに驚くべきことに、入会を求める者の多くは未だキリスト教徒でなかったという。そのため、信仰の指導、および洗礼を施すところから始めていかなければならなかったという。またパコミオスの妹マリアは同じ仕方で女子修道院を設立している。¹⁰

修道生活の動機

修道生活への影響として禁欲主義を挙げる者がいる。確かにアレクサンドリアのオリゲネス（185頃-254頃）は禁欲的であったし、グノーシス主義やストア派も禁欲的であった。しかし禁欲は、それ自体が目的ではなく、キリスト者は禁欲を通して、神により近く生き、よりよく神に仕えることを求めて、修道の道へと向かったことであろう。

キリスト教はその始まりから迫害を経験していた。始めはユダヤ教コミュニティによる迫害を受けた。またそれ以外の地域にも広がって行ったとき、他宗教からの攻撃を経験していった。そしてローマ帝国からの迫害が始まっていった。神に従うという信仰のゆえにいのちを捧げた殉教者たちはキリスト者から称賛された。神のための犠牲は尊いことと考えられていた。

更には天の御国ではめとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるとキリストは言われたのであり、この世において独身で神に仕えることは尊いことと考えられた。また終末が近いと考えられおり、すべてを神に捧げて生きたいと考えた人が多くいた。これらが修道生活へと向かった理由として考えられる。

8 Saint Pachomius, *The Rules of Pachomius*, trans. G.H. Schodde, (London, New York: T&T Clark, 1885).

9 "Saint Pachomius," *Encyclopaedia Britannica*. <https://www.britannica.com/biography/Saint-Pachomius>

10 ゴンザレス, 『キリスト教史・上』, pp. 159-162.

狭き門へ

迫害そしてキリスト教の性質に大きな変化が起こるのは4世紀である。4世紀の始めにはディオクレティアヌス帝による大迫害が起こる（303-311）。¹¹ 迫害をしばらく経験していなかった教会にとって、殉教者だけでなく、教会指導者の棄教者をも生み出すことになったこの迫害は大きな傷跡を残すことになる。しかしその10年後にはコンスタンティヌス帝のミラノ勅令（313）¹²によってローマ帝国の公認宗教と認められ、キリスト教に対する迫害は終わる。それどころか、同じ4Cの後半にはテオドシウス帝のもとキリスト教はローマ帝国の唯一の国家宗教となる（392）。この90年の間に、キリスト教は大迫害から帝国の国教となるという驚くべき変化を経験する。そして教会は、それまでの、明確な信仰を持った信仰者の教会（believers' church）から国家教会（state church）へと変わっていくことになる。そしていわゆるキリスト教国が生まれてくるのである。

初期のキリスト教徒は、洗礼を受けるとき、迫害を覚悟せざるを得なかった。狭い門を選びそこから入ったのである。しかし帝国の国家宗教となったとき、キリスト教徒となることは広い門から入る生き方となった。もはや迫害はない。教会は帝国のエスタブリッシュメントの一部になっていく。この変化の中でキリスト教の性質も変化していく。真剣な信仰者に対する高い基準は以前と変わらず保持していたのであるが、そこまでの高い意識を持っていない「すべての人々」を包括する緩やかな国家宗教としての役割が要求されるようになる。メノナイトの神学者ジョン・H・ヨーダー（John Howard Yoder, 1927-1997）の表現を用いるなら、郵便局が国家の通信部門を担うように、教会は国

11 この迫害は、副帝ガレリウスの主導によってこの始まった。ディアクレティアヌス帝の引退後も311年まで続いた。311年4月30日、ガレリウスは迫害を終わらせる勅令を出す。Ibid., pp. 117-121.

12 ローマ皇帝コンスタンティヌス・リキニウス会談の結果、リキニウス帝がニコメディアで公示（313.6.13）。古山正人他編、『西洋古代資料集 第2版』（東京大学出版会、2009）、pp. 234-237.

家の宗教・道徳部門を担うことが期待されていく。¹³ 神に仕えることに加えて、国家に仕えるという役割が生まれてくる。国家宗教としてのキリスト教が世俗権力と結び付くとき、そこを離れて、狭き門を自ら求めて行かなければならないと考えた人々が生まれてきたのは当然のことである。

前述のように、修道者はミラノ勅令（313）以前の3世紀後半から既に生まれていたのであるが、このような時代背景の中で人々は急激に修道生活に惹かれていくようになる。ゴンザレスはそれを「あるとき突然に何千という人々に伝染病のように広まって影響を与えた集団的脱出運動であった」と表現している。¹⁴

『聖ベネディクト会則』

独住修道は物理的また精神的な危険もあり、極端な禁欲に走ることもある。シリアの独住修道では、禁欲を越えて自分の体に過酷な責め苦を与える修道が行われていたことが知られている。例えば、柱の行者聖シメオン（390頃-459）は、初め修道院に入るが、激しい修行を行い、その後は修道院を出て独住修道へと向かう。そして約40年もの間、自ら建てた柱の上で修道している。

それに対して、共住修道は互いに支え合う共同体の中で修道を行っていく、より安全なシステムということができただろう。そしてそれを効果的に運営するためには、すべての修道の志を持つ人が実践できる、無理なく緩やかな、しかし芯の通った会則が必要になる。それに支えられて、共同体が形成される。その会則に従って、人々は修道生活の中で繰り返される祈りと労働を実践していく。そしてその共同体の中で、神に近づいていく助けを得ていくことになる。修道院が、靈性を保ち、経済的にも自立し、長く存続していくことを可能にする会則が必要とされる。

それを作ったのがヌルシアの聖ベネディクト(480頃-547)である。ベネディクトは西欧修道士の父と呼ばれる。彼は数年間の隠修生活の後、スビヤコに修道

13 John Howard Yoder, *The Priestly Kingdom: Social Ethics as Gospel*, (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1984), p. 60.

14 ゴンザレス, 『キリスト教史・上』, p. 155.

院を建てる。その後モンテ・カッシーノに移り、そこに修道院を設立する。6世紀に書かれた『聖ベネディクト会則』は、原本は存在しないが、修道院の規則として最も広く用いられ、西ヨーロッパの修道院に決定的な影響を与えてきた。今野國雄はその理由の一つに、「入門書としての優秀さ」があるという。¹⁵

ベネディクトはオリエントやアイルランド系の修道院のように徒に厳格で孤高な修行を要求せず、修道生活の全体を中庸の精神で一貫し、また修道士の労働や定住義務を重視することによってその経済的自立を確保させるとともに、共同体としての修道院の運営を機能的に組織化し、その自律性を原理的にも实际的にも確立させ、しかも世俗社会との連携をも考慮し、農村社会として形成されつつあった西ヨーロッパの世界に修道院を見事に適応させることになった。¹⁶

『聖ベネディクト会則』の序文と最終章(73章)には、以下のように記されている。「これを設立するにあたって、厳しすぎあるいは難しすぎることを課すつもりはありません。」(序：46)「そこで天の故郷目指して急ぐなら、あなたたちは誰であろうと、初心者のために記した、この最も控えめな戒律を、キリストの助けを借りて実行に移しなさい。」(73：8)¹⁷ これは修道生活初心者のためのものであるというのである。

『ベネディクトの会則』は厳し過ぎず、緩すぎないものであった。極端ではなく、多くの修道者がそれを実践することが可能な、適切なガイダンスとなったと考えてよいであろう。それに従った修道生活が今日まで1500年の間、支えられてきたことからだけでも、その有効性は実証されているといってよい。

15 今野國雄、『修道院：祈り・禁欲・労働の源流』，(岩波新書，1981)，pp. 79-80.

16 Ibid., pp. 79-80.

17 聖ベネディクト，『聖ベネディクトの戒律』，古田暁訳，(すえもりブックス2000)，pp. 13, 295.

Ⅱ. プロテスタントとして修道院をどのように考えるか

さて、プロテスタントとして修道院をどのように考えるか。16世紀から始まるプロテスタント教会においては、ルター派と聖公会の例外を除いて、修道院は見られない。ルター派と聖公会は、プロテスタントの中でもカトリックに近いところに位置しているため、修道会の重要性を理解しているのであろう。¹⁸しかしそれ以外のプロテスタント諸教派では修道院はない。それは、プロテスタントの基本原理が、「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」であり、聖書に修道院的生き方を示唆するような箇所はあっても、聖書に記されている初期のキリスト教に、長く続いた修道院的キリスト教の形式を見出すことができないからであろう。修道院は、3C以降にキリスト教の歴史の中で生み出されてきた伝統である。¹⁹

A. 「断捨離」的プロテスタント宗教改革

カトリックの研究を始めて気付いたのは、プロテスタンティズムは極めて「近代的」性質を持っているということである。それは、カトリックとの比較の中で初めて気付いた自らの伝統の性質であった。プロテスタンティズムには、ティリッヒのいう技術的理性（technical reason）も含んだ、理性的な傾向が強い。プロテスタンティズムは、近代の合理的精神に合致しており、近代社会を導く役割を担うことができたのだと思う。（あるいはプロテスタンティズムのゆえに近代社会はこのような方向へと向かったという見方もできるかもしれない。）しかし、今日われわれは近代の行き詰まりを経験している。現代は、近代的な枠を超えたキリスト教のありかたを求めるのに適切な時期で

18 ルターは、カトリック教会に破門されたためカトリックを出なければならなかったが、新しい教会を作るという意図を持っていたわけではなく、教会の改革を意図していた、聖アウグスチノ修道会（Ordo Sancti Augustini [O.S.A.]）の修道士であった。

19 ユダヤ教・クムラン共同体は初代教会の時代にも存在していたが、キリスト教ではなかった。

あろうと思う。

筆者は、プロテスタント宗教改革は、「断捨離」的に多くの不必要な（より正確には彼らが不必要と考えた）ものを捨て去ったと考えている。²⁰ プロテスタントの礼拝堂には聖書と十字架しかないのは象徴的である。きれいに片付いている！

ハーバード大学とテュービンゲン大学で教えた中世と宗教改革の研究者、ハイコ・オーガスティヌス・オーバーマン（Heiko Augustinus Oberman, 1930–2001）は、カルヴァンの聖書主義を原理主義的と見ている。「カルヴァンから現代の改革派の主流派に至るまで、ある一連の思想の流れが存在すること、それが聖書主義的でありその意味で原理主義的でもあることについては、誰も否定できないであろう。」²¹ それは近代的な態度といってもよい。

われわれは、大掃除のときに誤って大切なものを捨ててしまうことがある。プロテスタント教会は、大掃除のときに、いくつかの大切な宝も捨ててしまったのではないかと筆者は考えている。その一つは聖母マリアへの「特別な崇敬」の伝統である。これは聖母への礼拝・崇拜ではないのだが、ほとんどのプロテスタントの指導者は、筆者がかつてそうであったように、この違いもよくわかっていないと思う。（カトリックと東方正教会の伝統では、神への礼拝は *Latria*、聖母マリアへの特別な崇敬は *Hyperdulia*、天使や諸聖人への崇敬は *Dulia* と、区別されている。）

誤って捨ててしまったもう一つの宝は、修道院的な靈性の伝統ではないかと筆者は考えている。これも、（荒野の預言者は聖書に見ることができるが）修道院が聖書に直接表れていないことが主な理由ではないだろうか。プロテスタント宗教改革から500年以上経ったいま、プロテスタントは、もはやカトリックへの単なるアンチテーゼではなく、同じ伝統から発展してきた信仰者の群れ

20 藤原淳賀、『断捨離？』としてのプロテスタント宗教改革：21世紀の日本の視点から』『キリストと文化』34, (2019), pp. 85-124.

21 ハイコ・オーガスティヌス・オーバーマン、『二つの宗教改革：ルターとカルヴァン』日本ルター学会、日本カルヴァン研究会訳、（東京：教文館、2017）、p. 268.

であるという認識を持つべきであろう。そしてわれわれは互いから学ばなければならないし、幸いなことに、われわれはそれができる時代と環境に生かされている。

B. H・リチャード・ニーバー

とはいえ、筆者自身、修道院という形のキリスト教には、最近までほとんど関心を持っていなかったことも告白しなければならない。H・リチャード・ニーバー（H. Richard Niebuhr, 1894-1962）は、有名な*Christ and Culture*においてキリスト教を5つのタイプに類型化している。²² すなわち“Christ against culture”、“Christ of culture”、“Christ above culture”、“Christ and culture in paradox”、そして“Christ the transformer of culture”である。この分類では、修道院は世離れした“against Culture”という反文化型のキリスト教となる。ニーバーは、このタイプのキリスト教を、新約聖書に最も近いと評価する一方で、社会から分離し社会に対する責任を果たしていないと厳しく批判している。

また「新約聖書のキリスト」への従順ということについても、ニーバーは否定的に扱っている。彼はそれを、父と子と聖霊の三位一体ではなく「子の一神主義（Unitarianism of the Son）」であるとして批判する。²³ キリストは、人々を、キリストご自身に対してではなく御父に向けるのであり、子にのみ集中すべきでないというのである。キリストに集中しすぎると、ラディカルで偏ったキリスト教となり、現実社会では適応不可能であり、社会を変革することもできない、という批判になる。今風にいうと、新約聖書のイエス・キリストに集中すると「濃くなり過ぎる」ので、父と聖霊によって少し「薄めて」バランスを取り、文化的に常識的なキリスト教であるべきである、といったニュアンスがニーバーの三位一体論には見られるのである。

22 H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, (New York: Harper Torchbooks, 1975).

23 H. Richard Niebuhr, “Theological Unitarianisms,” *Theology Today* 60. 2. (1983), p.152.

C. ジョン・H・ヨルダー

ジョン・H・ヨルダーは、彼のアナバプテスト的キリスト教（メノナイト）が上記の反文化的キリスト教のカテゴリーに入れられていることに怒り、ニーバーを非常に強く批判している。そしてニーバーの三位一体論についても批判している。「子を見たものは父を見た」のであり、子は完全に父を表している。ニーバーのような父と子の間に緊張関係があるという誤った見方を防ぐために三位一体という教義があるというのである。²⁴

しかしヨルダーも修道院的キリスト教に対しては特に好意的ではないように思われる。ヨルダーは、*Original Revolution*の中で、イエス・キリストの時代の1世紀初頭には4つの選択肢があったという。しかしキリストは、それらとは異なる道を選ばれたと論じている。第一にエッセネのユダヤ教は、物理的に街から離れ、死海のほとりに修道院の共同体を作り、自分たちだけの閉じられた世界に生きた。クムラン共同体である。²⁵ 第二にファリサイ的ユダヤ教は分離的エリート主義であった。彼らは、街から離れることはせず街の中に住みながらも、律法を守ることを第一とし、「汚れた」人々からは距離を置き、交わることを避け、自分たちだけの閉じられた世界に生きた。第三にサドカイ的ユダヤ教は、政治的現実主義であり、ローマ帝国と妥協しながら自分たちの利権とユダヤ教社会の存続を守っていた。²⁶ 第四に熱心党は、暴力革命を起こしてもユダヤの尊厳と独立を勝ち取りたいと考えていた。

しかし、イエス・キリストは、このどれにも与することがなかったという。街から離れることなく、人々のただ中に生き、罪人と食事を共にした。暴力を

24 Atsuyoshi Fujiwara, *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*. Princeton Theological Monograph Series Book 179. (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2012), p. 26ff.

25 エッセネ派とクムラン共同体を区別する考え方もある。Cf. Florentino Garcia Martinez, "The Origins of the Essene Movement and of the Qumran Sect," *The People of the Dead Sea Scrolls: Their Writings, Beliefs and Practice*, ed. Florentino Garcia Martinez and Julio Trebolle Barrera, trans. Wilfred G.E. Watson, (Leiden: E.J. Brill, 1995), pp. 77-96.

26 このサドカイ的アプローチはキリスト教現実主義（ラインホルド・ニーバー）と同質のものである。

用いることもなく、律法を重んじ、高い基準を保ち、決して妥協することがなかった。しかしすべての人々を愛し、人々と共に生き、人々を受け入れ、癒やし、高めていった。イエス様は、上記4つのタイプのユダヤ教を越えた生き方を示された。

ヨーダーがこの本を書いた時代に「革命」という言葉がよく用いられていたこともあり、彼はこれこそが「最初の革命 (original revolution)」であると論じている。²⁷ ヨーダーの議論は概ね支持したいと思うが、彼も、自分たちの共同体の中で生きる修道院的なキリスト教を積極的に評価しているとは思えない。

D. 中世のキリスト教と文明を担ってきた修道院

しかしわれわれは、中世においてキリスト教を担ってきた中核に修道院があったことを覚えなければならない。ゲルマン人による西ローマ帝国の崩壊(476)以降、修道院が西洋文明の存続と発展を担ってきたといってもよい。トマス・カヒルは、ローマ帝国の一部にもならず、ゲルマン人による破壊を経験しなかったアイルランドの修道院が西ヨーロッパの文明を保存し、継承し発展させる役割を担ってきたと論じている。²⁸ アイルランドの修道士たちは、厳しい修行を行っただけでなく、学問研究においても優れていた。²⁹ アイルランドは「聖者と学僧の島 (The Island of Saints and Scholars)」と呼ばれていた。

中世の主要な神学者や霊的指導者は修道士であったか、あるいは修道院と密接な関係を持っていたことを覚えなければならない。例えば、カンタベリーのアンセルムス、サン・ヴィクトールのフーゴー、トマス・アキナス、ボナヴェントゥラをあげれば十分であろう。³⁰

27 John Howard Yoder, *The Original Revolution: Essays on Christian Pacifism*. Scottdale, PA: Herald, 1971.

28 トマス・カヒル, 『聖者と学僧の島: 文明の灯を守ったアイルランド』, 森夏樹訳, (青土社, 1997).

29 今野, 『修道院』, p. 54.

30 アリスター・マクグラス, 『キリスト教思想史入門: 歴史的概説』, 神代真砂実, 関川泰寛訳, (キリスト新聞社, 2008), p. 133.

いやそればかりか、16世紀に日本にキリスト教をもたらしたのが修道士たちであったことを忘れてはならない。フランシスコ・ザビエルを始めとするイエズス会が日本宣教を担った。当初はイエズス会に限られていた日本宣教であるが、その後、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会といった托鉢修道会もその働きに加わっていくことになる。この修道士たちは、キリスト教を伝えただけでなく、教育や慈善活動、医療活動といった社会活動も行っていた。応仁の乱で傷つき荒れ果てた日本でキリストのわざを行っていかれたのである。この意味でも修道院は、ニーバーの反文化的カテゴリーには収まらず、人々の魂に触れ、社会に深く関わり、人々と社会を変革していったのである。

E. ジョン・ウェスレー

修道生活は靈性を重んじる。初期には独住修道も盛んに行われていたが、修道院は共同修道の場であり、共同生活の中で、共に祈り、共に礼拝し、共通の労働の時間を持ち、共に食事をし、就寝の時間を守る。また断食を行う。修道院は、規則的な生活を重んじる。

プロテスタントの禁欲的生き方としてはピューリタンの伝統がある。また正統主義へのリアクションとしての敬虔主義も思い起こされるべきである。しかしプロテスタントで「聖め」という靈性の伝統を重んじる代表的なものはジョン・ウェスレー (John Wesley, 1703-1791) のメソジスト運動に見られる。その始まりは、ウェスレー兄弟のホーリー・クラブに遡る。彼らは、オックスフォード大学のカレッジで、規則正しい生活、読書と聖書の学び、祈り、善行、断食、また自身の靈的生活の評価を行っていた。これは修道生活と重なる要素である。

オーバーマンが原理主義とも呼ぶ、改革派の伝統では一般に「一度救われたならば、常に救われている (once saved, always saved)」と考える (perseverance of the saints)。福音派は、一度限りの回心、一度限りのコミットメントを重んじる。この内容について深入りすることは、ここではできないが、ウェスレーがそれとは異なる側面を重んじていたことはよく知られている。

そして霊性についても、継続的な規則正しい、誠実な生活の中で養われることをウェスレーは知っていた。ウェスレーは、1725年頃からトマス・ア・ケンピス等の著作を読み、神秘主義に惹きつけられている。ウェスレーは道徳的純潔（きよめ）、敬虔な生活を求めていた人物である。ウェスレーは、「人格喪失的神秘主義」あるいは没我的な神秘主義に対しては否定的になっていくのだが、高教会的な、形式を大切にした敬虔、聖礼典を通しての神秘主義を生涯重んじていた。ウェスレーの高教会的敬虔主義は、規則正しく、時間を有効に用いていく生き方であり、霊的修練を重んじた。それは修道院的であるといってもよいであろう。オックスフォード時代のウェスレーは、野呂によると、カトリック的な独身生活への憧憬を持ち、「カトリック的な告解の儀式を推奨し、諸聖人の日を守ろうとし」ていたという。³¹ 霊性を重んじ、それを養おうとするときに、よく考えられた規則正しい生活の繰り返し、習慣に向かわざるを得ないのである。³²

F. スタンリー・ハワーワス

「習慣」の重要性を最も理解している現代の神学者は、デューク大学名誉教授のスタンリー・ハワーワス（Stanley Hauerwas, 1940- ）である。ハワーワスは、その人格的倫理学において、習慣（habits）の重要さを論じている。³³ ハワーワスは、物語、共同体、習慣、徳、人格形成の関係を有機的に考えている。そして個々の具体的な倫理的判断をどのようにして行うかよりも、キリスト者としての徳を持った人格（character）が養われていくことがはるかに重要であると考えている。よい人格を持った人がよい判断、よい行動をするからである。

31 野呂芳男、『ウェスレー』、(清水書院, 1991), pp. 91-113.

32 アリストテレス的な意味での習慣とは、継続的に行うべきものとしてよく考えられた行為の繰り返しである。今日の日本人にとっては、イチロー選手の考え抜かれた習慣をイメージするとわかりやすいであろう。

33 Fujiwara, *Theology of Culture*, p. 78ff.

共同体には物語がある。それが大学であれ、企業であれ、国家であれ、また部活動であれ、その始まりからの物語がある。そこには苦難の歴史があり、また栄光の歴史がある。犠牲を払った人たちがおり、諦めなかった人たちがいる。その共同体に属する人々はその同じ物語を共有している。記念日にはその物語を思い起こし、過去の歴史を担ってきた方々に感謝し、自らのアイデンティティーを再確認する。新たにその共同体に加わる人々は、その物語を自分の物語としていく。そしてその共同体に参加していくのである。そしてその共同体の一員となることで、人々は共同体から影響を受けていく。先人たちの歩みにふさわしく、自分たちも新しい歴史を刻んでいこうと考える。そのようにして人格は形成されていく。

教会という共同体にとっては、規範としての旧新約聖書に記された神の物語がある。人の罪、にもかかわらずある神の愛と犠牲。わたしたちのことを決して諦めない神の愛がある。そしてこの2000年に亘るキリスト教会の物語がある。そういった物語によって教会は形作られ、キリスト者としてのアイデンティティーを再確認する。神がどのようにその民を扱ってこられたかを毎週の礼拝で思い起こす。それを繰り返す中でキリスト者としての価値観が内面化される。聖書が朗読され、説教でその物語が語られ、聖餐式によってその物語を実際に執り行い再体験し、新しい週を始めていく。そのようにしてキリスト教的徳を持った人格が養われていくというのである。

そしてキリスト教的徳というのは平和をつくりだす (peaceableな) 性質である。³⁴ キリスト者は、この世において既に神の国に生き始める者として、神の国の性質を身に帯びていく。それは神の愛の内に生き、神の赦しを受け取り、隣人を赦し、愛する平和 (shalom) 的な生き方である。

ハワーワスは、サザン・メソジスト出身で、現在ではむしろアングリカンのアイデンティティーを持っているプロテスタントの神学者であるが、カトリックのノートルダム大学で教えたことがあり、カトリックの多くの伝統を継承し

34 Stanley Hauerwas, *The Peaceable Kingdom: A Primer in Christian Ethics*, (London: SCM, 1984).

ている神学者である。2018年にハワーワース教授が来日した際、筆者は3日間親しくアテンドする機会を持ったが、その際に彼の信仰者としての思いや態度についても伺うことができた。彼は、カトリックの伝統に非常に深い敬意を持っている。³⁵

ウェスレーやハワーワースの神学は、繰り返される習慣、聖礼典、聖さ、人格形成、共同体を重んじるものであり、修道院的な伝統につながるものである。

結語

修道者に強いインスピレーションを与えたのは使徒言行録2、4章に記されている初期のキリスト者の生き方であった。すべての物を共有にし、必要に応じて、皆がそれを分け合い、毎日心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美するという生き方である。それは「聖書的」な生き方である。

プロテスタント宗教改革から500年以上を経た今、プロテスタントは、自らがそこから出てきた（あるいは出された）カトリックの伝統から謙虚に学ぶことがあってよいだろう。カトリックおよび正教会の伝統の中でずっと継承され発展してきた修道院の伝統を学ぶことで、また特に修道院的靈性の伝統から学ぶことで、プロテスタント教会は多くの祝福を受け取ることができる。筆者は考えている。本稿では、ウェスレーとハワーワースを紹介した。³⁶ それは、彼らが、聖め、キリスト教的人格（character）といった、キリスト者としての生

35 藤原淳賀監訳、「スタンリー・ハワーワース京都を歩く：ナショナリズムの潮流の中で教会とキリスト者の在り方をめぐる考察」、『Ministry』38, (2018.8), (キリスト新聞社), pp. 5-11. この記事では基本的にナショナリズムの問題にフォーカスを当てている。カトリックの伝統については、個人的な食事の時等の対話の中で語られた。許可を得て録音させていただいている。

36 他にプロテスタントの伝統の中で修道院的要素を持っていたものとして、ピューリタンの禁欲の伝統と正統主義へのリアクションとしての敬虔主義にも注意が払われるべきである。

き方に関わることを大切にしているからである。神を愛し隣人を愛すること、神に近づくこと、謙^{へりくだ}ること、小さきものとして生きること、人に仕えることを実際に行っていこうとすると、祈りに時間を捧げ、礼拝を生活の中心にし、修道院的な伝統の方に向かっていくように思われるのである。

Appendix 修道院との出会いについて

学術的な研究に個人的なことを含むべきではないと考える人がいることは承知しているが、筆者は、研究と個人史は分けられないと考えている。特に神学という分野の研究は、本来、単に知的好奇心を満足させるものではなく、神への応答として、神への捧げものとして行われるものである。その質が優れたものでも不十分なものでも、自分の人生の発展の中で神に示されてきた真理の探求を研究として行うのであり、神学研究は実存的に行われなければならない。筆者の修道院との出会いについて記しておきたい。

筆者は近現代のキリスト教神学・社会倫理学を専門としてきたのだが、青山学院大学に着任してから中世のキリスト教についての講義をする機会が与えられた。それにより、キリスト教の伝統の豊かさの新たな面を知ることとなった。特にそのコース（歴史と人間）を共に教えている「古代」担当の竹田文彦教授（清泉女子大学、日本在世フランシスコ会全国兄弟会会長〔カトリック〕）と「近現代」担当の馬淵彰教授（日本大学、ジョン・ウェスレーおよびメソジスト運動研究者〔プロテスタント〕）とは、毎週の講義後に1時間から1時間半ほどの対話のときを持つという幸いな機会が与えられている。カトリックやプロテスタントの伝統について、研究者としてまた信仰者として、理解を深めるときとなっている。

プロテスタントの神学校では、キリスト教2000年の歴史を、プロテスタント宗教改革が始まった1517年までと、それ以降に分けて教えることが多い。そして古代については比較的詳しく扱うが、1000年に亘る中世については、わずかなトピックや神学者を概観的に扱うのみで、あまり重きが置かれていないよう

に思われる。そしてどちらかという批判的に扱われることが多いのではないだろうか。そういったこともあり、プロテスタントの牧師たちは、実はあまり中世を知らないのではないかと思う。

中世の研究を始めてから、筆者がかつて学んだイングランドのダラム大学では、中世のキリスト教の研究だけでなく、カトリックや東方正教会の研究がなされていたことを思い出した。そしてアングリカンの伝統が、プロテスタントとカトリックとの橋渡し的な役割を果たしていることに気づいた。

アングリカンの伝統は広い。カトリックに近いアングロ・カトリック的な伝統もあるし、そこからは遠く離れた福音派的なものまで、様々な流れを含んでいる。アングリカンの伝統は「多様性の中の一致」といわれる。³⁷ 中世の研究を始めた頃、筆者の自宅の近くに聖公会の修道院があることを知り、外部にも開かれている朝、昼、夕の一日三度の礼拝に出席させていただく機会を得るようになった。そこでは、昼にはアンジェラスの祈り（お告げの祈り）が聖母マリアに捧げられていた。

その橋に留まらず、その橋を渡った先にあるカトリックの修道院に関心を持った。修道院を理解するためには、修道院に身を置き、修道院での祈りの生活がどのようなものなのかを経験しなければならないと考えた。そして西ローマ帝国がゲルマン人による破壊を経験していく中で、ヨーロッパ文明とキリスト教を保持し、「聖者と学僧の島」と呼ばれたアイルランドの修道院に関心を持った。

37 日本聖公会のナタナエル植松誠首座主教は聖公会の特徴として「多様性の中の一致」を挙げられている。そして「聖公会の司祭であった」ご自身の「父方の祖父は、いつも『めでたし、聖寵充ち満てるマリア……』（天使祝詞）を唱えていたし、マリアの無原罪の御宿りも被昇天も深く信じ、キリストを抱いたマリアのイコンの前で深々と頭を下げ十字を切っていたのを思い出す」という。「一方、母の父も司祭であったが、その福音派的な信仰の中では、マリアはそれほど大きな意味を持っていなかったように思うし、マリア像などは決して礼拝堂に置くことはなかったと思う」という。聖公会-ローマ・カトリック教会国際委員会、『マリア：キリストにおける恵と希望』、聖公会-ローマ・カトリック合同委員会訳、（教文館、2007）、p. 8.

A. グレンスタル・アビー (Glenstal Abbey)

修道院の研究で博士の学位を取られたある方からのアドバイスをいただく機会を得た。単なる訪問や観光ではなく滞在する修道院を求めているのであるなら、ベネディクト派修道院、グレンスタル・アビー (Glenstal Abby) がよいと勧められた。夏期休暇の間にそこでしばらく祈りの時を過ごすことにした。研究のためというよりも自分の霊性を養うためであった。

ダブリンから西南西に約200km、下記クロンマクノイズ (Clonmacnois) から南西に約100kmのリムリック州マロー (Moroe, County Limerick) に位置している。50人ほどの修道士たちが所属しておられた。これが初めての修道院との深い出会いとなった。³⁸

個室が与えられ、朝、昼の祈りと、夕刻のラテン語での祈り (晩課 [vesper]) を修道士の方々と共にすることが許された。また朝食は各自で宿舎で、そして昼食は別室でいただくのだが、夕食は修道士の方々と共にさせていただいた。



夕食は、入室が許されると、完全な沈黙のうちに、簡素な食事が手際よく用意される。食事の間中、沈黙が保たれるうちに、一人の修道士が有益な書物を朗読をする。ベネディクト派のスタイルであった。私の滞在中はちょうど日本の開国時の歴史が朗読されていた。そのこともあり、私のことを覚えて声を掛けてくださる修道士の方もいた。

アダムとエヴァはエデンの園に置かれた。美しい庭は天を地上に表すものとも考えられる。事実、われわれは、コンクリートとアスファルトに囲まれていると苦しくなり、緑を求める。グレンスタル・アビーは自然に囲まれているの

38 英国での大学院時代には、ヘンリー8世の宗教改革によって廃墟となったイングランドの修道院をいくつか訪れたことはあったが、実存的な意味ではこれが最初の出会いと言ってよい。



だが、1986年からその大きな園を美しく整え、人々の憩いの場にしてきたのがブライアン神父である (Fr. Brian P. Murphy)。私は、礼拝と礼拝の間のほとんどの（雨が降っていない）時間を庭で瞑想と観想に用いるようにしていたのだが（礼拝堂は工事中で、礼拝は簡易礼拝堂でなされていた）、庭仕事をしているブライアン神父は私を見つけると声を掛けてくださった。（写真左）納屋からご著書を取り出し、サインしてくださった。³⁹（写真右）

更に幸いなことに、前修道院長クリストファー神父 (Fr. Christopher Dillon) が宿舎担当の世話役としておられたため、毎朝の朝食時には、アイルランドの修道院、またベネディクト派の修道院について様々な話を聞き、またアドバイスを受けることができた。私は中世の神秘主義に関心を持ち始めていたので、そのことを話したところ、14世紀イングランド神秘主義の英国の代表作 *Cloud of Unknowing* をポルトガル語に翻訳したリノ神父 (Fr. Lino Moreira) (写真) を紹介してくださった。リノ神父は同修道院の学校での教師でもあったため忙しいスケジュールの中であつたが、同書の読み方と、また瞑想、観想の祈りにつ



39 Brian P. Murphy, *Glenstal Abbey Gardens: c. 1650 to the Present: from Townland to Terrace Garden and Beyond*, (Papaver Editions, 2014).

いての指導をしてくださった。⁴⁰ 彼に勧められた版の*Cloud of Unknowing*をKindleで直ぐにダウンロードでき、読み始めることができたのは、現代の修道院の経験として興味深く感じた。実際、この修道院で、アビラの聖テレサや十字架の聖ヨハネといった中世の神秘家たちについても知り、読み始めるようになった。⁴¹ これらの著作の重要なものが既に日本語に翻訳されていたことは、帰国後知ることとなった。

またこのアイルランド訪問中に、現在は廃墟となっているが、かつてアイルランドのキリスト教の中心地であった修道院、グレンダロッホ（Glendalough）とクロンマクノイズ（Clonmacnoise）を訪問する機会を得た。⁴²

B. グレンダロッホ（Glendalough）

グレンダロッホ（2つの湖の谷）は、アイルランドの首都ダブリンの南50kmほどのところに位置している。6世紀アイルランドの伝説的な聖ケヴィン（St. Kevin [Coemgen], 498頃-618）によって建てられたアイルランド初期の修道院である。グレンダロッホ修道院はケヴィン自身と彼の少数の弟子たちのために作られたのだが、次第にキリスト教の聖地として多くの人々を惹きつけていく。グレンダロッホは約6世紀にわたってキリスト教の中心地であり、また政治、文化の中心地となっていった。アイルランドはバイキ



40 作者不詳、『不可知の雲』、奥田平八郎訳、（現代思想社、1969）。

41 アビラの聖テレサ、『神の憐れみの人生・下』、高橋テレサ正江訳、鈴木宣明監修、（長崎市：聖母文庫、2012）。Idem、『靈魂の城』、高橋テレサ正江訳、鈴木宣明監修、（長崎市：聖母文庫、2015）。十字架の聖ヨハネ、『靈の賛歌』、東京女子カルメル会訳、（ドン・ボスコ社、2008）。Idem、『カルメル山登攀』、奥村一郎訳、（ドン・ボスコ社、2013）。Idem、『暗夜』、山口女子カルメル会改訳、（ドン・ボスコ社、2015）。

42 Christiaan Corlett, *Glendalough*, (Coles Lane, 2017). George McClafferty, *Glendalough: History, Monuments & Legends*, (Blackrock, Co. Dublin: The Columba Press, 2012).



ングによる略奪、イングランドによる攻撃・支配を受けていくのだが、グレンダロッホは深い森の中にあることもあり、長い間守られたという。

C. クロンマクノイズ (Clonmacnoise)

クロンマクノイズ修道院（写真次頁）は、アイルランドの西岸にあるアラン諸島でも宣教した、聖キアラン（St. Ciaran, 512-544）が建てた。クロナード（Clonard）と並んで、アイルランドを代表する修道院であった。⁴³ キアランはここに544年、修道院学校を建てたが、その年のうちに病で亡くなっている。

クロンマクノイズは7世紀から12世紀にかけて栄えたアイルランドの修道院文化に中心的な役割を果たした。特に6-7世紀のアイルランド修道院は非常に発展していたという。向学心に燃える学生たちが海外から船を連ねてアイルランドに旅しているという記録もある。⁴⁴ カロリング・ルネッサンスを指導したヨークのアルクイン（Alcuin of York, 735頃-804）もクロンマクノイズで大

43 なお、世界最古のウイスキーは、このクロンマクノイズ修道院で作られたとのことである。修道院では聖餐式のためにワイン、また「飲むパン」ともいえるビール、そして薬の役割も含んだ命の水（*Aqua Vitae*）、蒸留酒ウイスキーが作られた。Robert Scott-Moncrieff, "Note on the Early Use of Aqua Vitae in Scotland," *Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland*, 50, (1916), p. 263.

44 今野、『修道院』, pp. 54-58.



修道院長、賢者コルグ（Colgu the Wise）から学んでいる。⁴⁵

クロンマクノイズは、アイルランドの中央を流れるシャノン川岸に位置しており、宗教的中心地であったのみならず、商業的にも栄えた。教会と修道院の聖職者や学生たちだけでなく、周りには金属細工師、職人、農家が住み、コミュニティが形成されていた。

衰退は12世紀に始まってくる。シャノン川の北に位置するアスローン（Athlone）が発展し地域の中心がそこへと移っていった。またヨーロッパ大陸からベネディクト会、フランシスコ会、アウグスチノ会、クリュニー会といった他の修道会が競合相手として入ってきたことも指摘されている。また、12世紀にアイルランドのキリスト教が、修道院中心から教区中心へと移行して行ったことも要因であるという。

川岸は便利であると同時に攻撃も受けやすい。クロンマクノイズは、国内の人々からの攻撃だけでなく、ノルマン人やバイキングの襲撃にも耐えた。しかしイングランドのヘンリー 8 世による修道院の解散（1552）によってダメージを受ける。最終的には1552年にイングランドの駐屯軍によって破壊された。

45 Elizabeth Rees, *Celtic Sites and Their Saints: A Guidebook*, (Bloomsbury Publishing, 2003), p. 203. “Abbey and School of Clonmacnoise” The Catholic Encyclopedia. <http://www.newadvent.org/cathen/04065a.htm>

引用参考文献

- 五十嵐修. 2001. 『地上の夢キリスト教帝国：カール大帝の＜ヨーロッパ＞』 講談社.
- 今野國雄. 1971. 『修道院』 世界史研究双書 7. 近藤出版社.
- 今野國雄. 1981. 『修道院：祈り・禁欲・労働の源流』 岩波新書.
- ヴィケール, M.- H. 2004. 『中世修道院の世界：使徒の模倣者たち』 渡辺隆司, 梅津孝孝 訳. 八坂書房.
- オーバーマン, ハイコ・オーガスティヌス. 2017. 『二つの宗教改革：ルターとカルヴァン』 日本ルター学会, 日本カルヴァン研究会 訳. 教文館.
- 小高毅. 2015. 『靈性神学入門』 教文館.
- カトレット, ホアン. 1982. 『十字架の聖ヨハネの靈性：無の求道者=神秘家の信仰の道』 高橋敦子 訳. 中央出版社.
- カヒル, トマス. 1997. 『聖者と学僧の島：文明の灯を守ったアイルランド』 森夏樹 訳. 青土社.
- 草光俊雄, 河原温. 2012. 『ヨーロッパの歴史と文化：中世から近代』 放送大学教育振興会.
- ゴンザレス, フスト. 2014. 『キリスト教史・上巻：初代教会から宗教改革の夜明けまで』 石田学 訳. 新教出版社.
- 作者不詳. 1969. 『不可知の雲』 奥田平八郎 訳. 現代思想社.
- 佐藤彰一. 2009. 『中世世界とは何か』 岩波書店.
- サザーン, R.W. 2007. 『西欧中世の社会と教会：教会史から中世を読む』 上條敏子 訳. 八坂書房.
- シェルドレイク, P. 『キリスト教靈性の歴史』 木寺廉太 訳. 教文館.
- シゲマツ, ケン. 2015. 『忙しい人を支える賢者の生活リズム』 重松早基子 訳. いのちのことば社.
- 篠原明. 2019. 『「靈性の神学」とは何か：福音主義の靈性を求める対話』 あめんどう.
- 小学館国語辞典編集部. 2006. 『精選版日本国語大辞典』 小学館.
- ジョンストン, ウィリアム. 2017. 『愛と英知の道：すべての人のための靈性神学』 九里 彰 監訳. 岡島禮子, 三好洋子, 渡辺愛子 訳. サンパウロ.
- 杉崎泰一郎. 2015. 『修道院の歴史：聖アントニオスからイエズス会まで』 創元社.
- スミス, キャサリン・アレン. 2014. 『中世の戦争と修道院文化の形成』 井本响二, 山下 陽子 訳. 叢書・ユニベルシタス1009. 法政大学出版局.
- 聖公会-ローマ・カトリック教会国際委員会. 2007. 『マリア：キリストにおける恵と希望』 聖公会-ローマ・カトリック合同委員会 訳. 教文館.
- 聖テレサ, アビラの. 2012. 『神の憐れみの人生・下』 高橋テレサ正江 訳. 鈴木宣明監修. 長崎市：聖母文庫.
- . 2015. 『靈魂の城』 高橋テレサ正江 訳. 鈴木宣明監修. 長崎市：聖母文庫.
- 聖ベネディクト. 2000. 『聖ベネディクトの戒律』 古田暁 訳. すえもりブックス.
- 聖ヨハネ, 十字架の. 2008. 『靈の賛歌』 東京女子カルメル会 訳. ドン・ボスコ社.

- _____. 2013. 『カルメル山登攀』奥村一郎訳. ドン・ボスコ社.
- _____. 2015. 『暗夜』山口女子カルメル会改訳. ドン・ボスコ社.
- ディンツェルバッハー, ペーター, ジェイムズ・レスター・ホッグ. 2014. 『修道院文化史辞典』朝倉文市監訳. 八坂書房.
- 出村彰. 2005. 『中世キリスト教の歴史』日本キリスト教団出版局.
- ドウソン, C. 1996. 『中世のキリスト教と文化』野口啓祐訳. 新泉社.
- 戸田聡. 2008. 『キリスト教修道制の成立』創文社.
- 戸田聡編訳. 2016. 『砂漠に引きこもった人々: キリスト教聖人伝選集』教文館.
- ノウルズ, D. 1972. 『修道院』朝倉文市訳. 平凡社.
- 野呂芳男. 1991. 『ウェスレー』清水書院.
- フィリップス, スーザン・S. 2018. 『スピリチュアル・ディレクション: 霊的同伴への招き』重松早基子訳. いのちのことば社.
- 藤原淳賢. 2018. 「『断捨離?』としてのプロテスタント宗教改革: 21世紀の日本の視点から」『キリスト教と文化 (34)』青山学院大学宗教主任研究叢書. 85-124.
- 藤原淳賢監訳. 2018. 「スタンリー・ハワース京都を歩く: ナショナリズムの潮流の中で教会とキリスト者の在り方をめぐる考察」, 『Ministry』38. キリスト新聞社. 5-11.
- フランク, K.S. 2002. 『修道院の歴史: 砂漠の隠者からテゼ共同体まで』戸田聡訳. 教文館.
- ブリタニカ・ジャパン編. 2019. 『ブリタニカ国際大百科事典小項目版 2019 プラス世界各国要覧』ロゴビスタ.
- 古山正人他編. 2009. 『西洋古代資料集 第2版』東京大学出版会.
- ブルノ, イエズス・マリアの. 1991. 『十字架の聖ヨハネ』石沢幸子訳. 西宮カルメル会改訳. ドン・ボスコ.
- ベネディクト. 2000. 『聖ベネディクトの戒律』古田暁訳. すえもりブックス.
- ボナヴェントゥラ. 2004. 『観想の道: 三様の道・生命の完成』小高毅訳. サンパウロ.
- 堀越孝一. 2014. 『中世ヨーロッパの歴史』講談社学術文庫.
- 堀米庸三編. 1980. 『西欧精神の探求: 革新の十二世紀』日本放送出版協会.
- マクグラス, アリスター・E. 2008. 『キリスト教思想史入門: 歴史神学概説』神代真砂実, 関川泰寛訳. キリスト教新聞社.
- 山形孝夫. 2006. 『砂漠の修道院』平凡社.
- ルクレール, ジャン. 2004. 『修道院文化入門: 学問への愛と神への希求』神崎忠昭, 矢内義顕訳. 知泉書館.
- ルノー, エマニュエル. 1981. 『霊性の大家 アヴィラの聖テレサ: 神秘体験の証人』前田和子訳. 中央出版社.

Corlett, Christiaan. 2017. *Glendalough*. Coles Lane.

Cross, F.L. and E.A. Livingstone. Ed. 1997. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Third Edition. Oxford: Oxford University Press.

- Fujiwara, Atsuyoshi. 2012. *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*. Princeton Theological Monograph Series Book 179. Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers.
- Hauerwas, Stanley. 1984. *The Peaceable Kingdom: A Primer in Christian Ethics*. London: SCM.
- Louw, Johannes P. and Eugene Albert Nida. 1996. *Greek-English Lexicon of the New Testament: Based on Semantic Domains*. New York: United Bible Societies.
- Maguire, Annetta. 2015. *Praying with Christian Mystics*. Blackrock, Co. Dublin: The Columba Press.
- Martinez, Florentino Garcia. 1995. "The Origins of the Essene Movement and of the Qumran Sect." *The People of the Dead Sea Scrolls: Their Writings, Beliefs and Practice*. Ed. Florentino Garcia Martinez and Julio Trebolle Barrera. Trans. Wilfred G.E. Watson. Leiden: E.J. Brill. 77-96.
- McClafferty, George. 2012. *Glendalough: History, Monuments & Legends*. Blackrock, Co. Dublin: The Columba Press.
- Murphy, Brian P. 2014. *Glenstal Abbey Gardens: c. 1650 to the Present: from Townland to Terrace Garden and Beyond*. Papaver Editions.
- Niebuhr, H. Richard. 1975. *Christ and Culture*. New York: Harper Torchbooks.
- _____. 1983. "Theological Unitarianisms." *Theology Today* 60. 2. pp. 150-57.
Originally appeared under the title "The Doctrine of the Trinity and the Unity of the Church." *Theology Today* 3.3 (October) 371-84.
- Rees, Elizabeth. 2003. *Celtic Sites and Their Saints: A Guidebook*. Bloomsbury Publishing.
- _____. 2011. *Celtic Saints in Their Landscape*. Amberley Publishing.
- Saint Pachomius. 1885. *The Rules of Pachomius*. Trans. G.H. Schodde. London, New York: T&T Clark.
- Scott-Moncrieff, R. 1916. "Note on the Early Use of Aqua Vitae in Scotland." *Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland*, 50, pp. 257-266.
<http://journals.socantscot.org/index.php/psas/article/view/7383>
- Yoder, John Howard. 1971. *The Original Revolution: Essays on Christian Pacifism*. Scottdale, PA: Herald.